

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 2 年 6 月 10 日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2019

課題番号：26370448

研究課題名(和文)メンタルスペース理論によるアスペクトに関する日英仏対照研究

研究課題名(英文)A Contrastive Study on Aspect by Mental Space Theory in English, Japanese and French

研究代表者

井元 秀剛 (Imoto, Hidetake)

大阪大学・言語文化研究科(言語文化専攻)・教授

研究者番号：20263329

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、フランス語で「avoir+過去分詞」、英語で「have+過去分詞」、日本語で「た」「ている」によって示される完了形式が、それぞれの言語でどのような内容を表し、どこまでが共通で、どこまで異なるのかを明らかにするとともに、その違いがどこから来ているのか、ということ各言語の文法体系の違いに依拠して説明することを試みたものである。

完了の本質はEVENTとFOCUSの遊離であるが、その背後にはPASTという関係が常に存在していること、フランス語の場合、視点の働きがアスペクトにかかわること、日本語ではそもそも「完了」の記述が「過去」に発展していくという違いがあること、などを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の成果はメンタルスペース理論という形式的な体系に基づいて、複数言語にわたるアスペクトの概念を客観的に定義し、各言語間の振る舞いの違いを明らかにしたことにある。アスペクト概念はEVENTと他のスペースとの間に生じた時間関係の上に、話し手の主観的解釈が入り込むV-POINTやFOCUSとの関係で時制の上に被さる概念であり、各言語による振る舞いの違いは、動詞で述べる事柄に対して話し手がそれをどれだけ自分に身近なものとして捉えるのかという距離の取り方の違いを反映している。

この研究は各言語の時制体系全体の理解に役立つものであり、中級フランス語の学習者の理解を深めることなどに貢献している。

研究成果の概要(英文)：In this study, relying on the differences in grammatical systems of each language, I attempted to clarify the notion of perfect indicated by "avoir+past participle" in French, "have+past participle" in English, and ta and teita in Japanese. The question is what extent they are common and different in each language; I try to explain where the differences come from.

The essence of perfect is the separation of EVENT and FOCUS, and there is always a relationship called PAST behind it. In English, there is an explicit emphasis on FOCUS, but in French, the function of the V-POINT is also related to the aspect.

研究分野：フランス語学

キーワード：アスペクト テンス メンタルスペース理論

## 1. 研究開始当初の背景

筆者は2010年に上梓した『メンタルスペース理論による日仏英時制研究』によって、日仏英の時制の仕組みを客観的に記述する方法を提案していた。とりわけフランス語の半過去と大過去さらにそれとの比較としての前過去の振る舞い、英語とフランス語の未来形の価値の異なり、日本語タ形に関する記述が主であったが、この新しい手法による分析で、一見複雑に見えるフランス語の時制体系の全貌がつかめ、英語や日本語の違いも明らかにすることができた。このような背景を踏まえ、井元(2010)では扱っていなかったテイル形なども視野にいれ、テンスと密接に結びついたアスペクトの概念を中心に添えて理論構築を図りたいという意図があった。特にテイル形は英語の *be going to* を用いた進行相のアスペクトと直接の関係があるが、「その時すでに終えていた」のような場合は *had already finished* のような完了相とも対応する。なぜ、このような対応になり得るのか、そもそも完了に特化した表現と思われる英語の「*have + pp*」の構文も、過去完了の場合、完了相ではなく、過去から見たさらなる過去の完成相を表す場合もあり、このアスペクトマーカーが何をしているのか、という問題があった。英語やフランス語後ではこのアスペクトマーカーは直接話法の過去形を間接話法にするとときに用いられるが、日本語ではそのような変化は起きない、これはなぜなのか、各言語でアスペクトの扱いや振る舞いがどのように違っているのか、という問題意識が生まれていたためである。

個別言語のアスペクトおよび、アスペクト標識とされる個々の記号に関する研究はこれまでに数多くなされてきているが、異なった言語の標識を対照的に扱った研究は決して多くはない。たとえば、フランス語の複合過去と英語の現在完了形は同じような、「助動詞 + 過去分詞」によって構成される。この形式はフランス語では完了のみならず過去をも表すことはよく知られているが、英語の完了形がすべて複合過去で表現されるわけではない。He has lived in Japan for three years. という完了はフランス語では *Il habite au Japon depuis trois ans.* のように現在形で表現しなくてはならない。一方日本語では「彼は三年前から日本に住んでいる」と「テイル」形が使用される。テイル形は反実仮定の条件文で「昨日{晴れていたなら / \*晴れたら}森を散歩していた」のように、英語の仮定法過去完了もしくはフランス語の大過去に相当するするような働きをすることから、一部それらの完了表現に重なる部分もあるが、進行形や現在形さらにはフランス語の半過去のように未完了の典型とされるような時制形式に相当する場合もある。そもそも「完了」とは汎言語的にはどのように定義すべきものなのか、なぜ言語によって完了形式の表現される幅が異なるのかという問題は、まだ本格的に扱われてはいない対照研究のテーマとして残っていた。

本研究が依拠するメンタルスペース理論は G. Fauconnier によって 1984 年に提唱されたものであるが、この理論に基づく本格的なテンス・アスペクト研究は Cutrer, M. (1994), *Time and tense in narrative and in everyday language*. Ph.D. thesis, University of California San Diego. を待たなくてはならない。この研究を自著でも紹介した Fauconnier はしかし、その後言語記号の分析よりは、人間の思考一般の問題を扱うようになり、理論言語学分野ではこの理論をベースにした研究はほとんど見られなくなってきている。だが、申請者は井元(2010)においてこの理論を改めてとりあげ、この理論が英仏語のみならず、日本語の分析にも応用が可能で、厳密な言語理論として精緻化できることを示した。本研究はその延長でアスペクトを扱うものである。BASE, V-POINT, FOCUS, EVENT という4つの基本スペースを設定し、各言語のアスペクト標識もこのスペース構成に対応する。英仏語の「助動詞 + 過去分詞」は V-POINT より EVENT が過去にあることを示し、英語の現在完了は FOCUS の位置が BASE および V-POINT と重なることを要求するが、フランス語では FOCUS の位置に対する指定はない。日本語は BASE や FOCUS は文脈によって定まるのみで時制アスペクト形式は V-POINT と EVENT の位置のみを決定する。テイル形では完了状態を表すことそのものが EVENT であり、V-POINT と EVENT が同一であることが要求されているという構成の違いが基本になっていて、細かい用法の違いなどはこの構成の違いから派生されるものであると予想している。このような予想のもとに、現実のあらゆる用例や翻訳例などを参考に具体的に立論を展開していくことを試みた。

## 2. 研究の目的

そこで、本研究の目的として、フランス語で「*avoir* (もしくは *être*)+過去分詞」、英語で「*have + 過去分詞*」、日本語で「た」「ている」によって主として示される完了形式が、それぞれの言語でどのような内容を表し、どこまでが共通で、どこまでが異なるのかを明らかにするとともに、その違いがどこから来ているのか、ということ各言語の文法体系の違いに依拠して説明すること、を全体的な目的としてたてた。

本研究で対象としているのは現代フランス語、現代英語、現代日本語の3つであり、本研究の目的はそれぞれの言語が個別にそなえている動詞のアスペクト体系を、メンタルスペース理論に基づいて統一的に、一般言語学的観点から記述することにある。この目的を遂行するために、お互いに関連しあう以下の3つのより具体的目標が設定された。

### 1) 個別記号の対照研究

第一の目標は、フランス語の avoir /être +p.p. 英語の have+p.p.日本語のタ形テイル形といった具体的な完了のAspect標識の対照研究である。理論的研究といってもその理論は事実の正確な記述の上に成り立つものであり、地道な用例の収集と観察は抽象的な理論構築の前にまゝ行わなくてはならない基本である。各言語における標識の共通点と相違点を正確に記述するとともに、それら記号の本質的に働きを探り、明らかにする。これらのAspect標識と対照される現在形や過去形、特にフランス語の半過去などのAspectおよびテンス標識なども同時に扱う。

### 2) 環境条件の対照研究

第二の目標は、記号そのものの価値に正面からあたるのではなく、具体的には条件文の環境の中でAspect標識がどのように働くかを探るものである。英仏語では完了Aspectが蓋然性の低さというModality価値をになうことがある。たとえば未来の仮定の前件を Si mon père était venu demain と大過去で表現すれば、半過去で表現する場合と比べて、絶対にあり得ないことというニュアンスが生まれる。これはなぜであり、どうして日本語ではそれが適応されないのか、また日本語のト条件文はル形、タラ条件文はタ形を内包しているのに、なぜ「そこに{行くと/行ったら}景品がもらえる」のように同じ条件を表せるのかなど、条件文という環境が要求する条件とAspectがどのように関わり合うのかを明らかにする。

### 3) 理論的総合研究

第三のそして最終目標は第一、第二の成果に基づき、メンタルスペース理論を、各言語にまたがるAspect特性を一樣に扱える一般性の高い言語分析の装置として構築することにある。申請者のこれまでの研究で、時制形式の記述に対してはそれなりの成果が見られているが、Aspect標識にまでは適応していない。今回の具体的な完了Aspectの分析を通じて、テンス・Aspectに関する統一のとれた理論体系を構築することが今回の研究の最終目的である。

## 3. 研究の方法

本研究は言語の実証的な観察に基づく理論的研究である。従って、データに基づき仮説を設定し、その仮説を検証するという作業と、それと平行して進められる理論的考察が研究の二つの柱となる。実証面では、良質のデータを以下の資料体から収集することを考えていた。

- 1) 電子コーパス、電子テキスト
- 2) 文学テキストとその翻訳
- 3) 作例 (数人のネイティブスピーカーに適格性の判断を依頼して作成する資料)

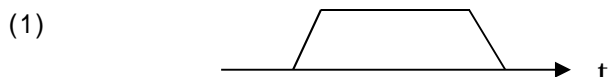
これらのうち、特に対訳の電子コーパスの作成を行い、それを利用することを考えている。ParaConc という対照コーパス用のすぐれたソフトがあるが、それを用いる日仏等の対訳データは現在不足しており、適宜作成しつつ研究を進めていきたいと考えていた。実際には対照データを作成してから検索する、という方法では迂遠であり、直接電子データから関係する例文を拾った方が効率がよいため、対訳コーパスは作成しなかった。その一方で、当初は文字データしか考慮に入れていなかったが、口語データとしてDVDから聞き取った会話の用例なども参照した。

理論面では研究図書と批判的な検証が中心になる。メンタルスペース理論は認知言語学の流れの中に位置づけられるものであり、Langackerの著作を始めとして主としてMouton de Gruyter社から出版される研究書には最新のものを常にチェックしておきたいと考えていた。ただ、結果的には認知言語学からは日本語と英語の認知モードを研究した中村(2009)などの議論は考察に影響を与えたが、個別の現象に関する古典的な研究を参照したケースの方が多かった。

## 4. 研究成果

現実に発話された動詞のAspect価値は個々の動詞がもつ固有のAspect価値と文脈の働きとの総合である。この二つは明確に区別されなくてはならない。語彙的Aspectは動詞がその語義として本質的に担っているAspectであり、筆者はPustejovsky (1991)にならって、すべての動詞のAspectタイプをState (状態動詞)、Process (全体動詞)、Transition (変化動詞)の3つに分類する。各々の動詞はこのどれかに属するが、これは語義に内在するAspectである以上、多義を認めない限り1つの動詞が複数のタイプにまたがって存在することはない。Processに属する動詞が、発話内でTransitionの性質をになうことがあるとすれば、それはProcessをTransitionに変質させるような文脈の働きがあったからであり、その働きの多くは文法的な一般化が可能な現象なものである。この一般化を怠り、発話上のAspectを個々の語彙レベルの特性に押し込んでしまえば現象の本質を見失うことになると思う。

例えば、文法的アスペクト操作の典型の一つに状態化というのがある。日本語のテイル形、英語の進行形や完了形、あるいは現在時制やフランス語における半過去などにこの作用がある。にそもそも動詞が表しているのは時間を伴った状態のありようなのだから、横軸を時間軸、縦軸を状態とすると、より抽象的な形として



のように図示することができる。は事態の開始点、は事態の終了点である。アスペクトとして問題となるのは、とによって区切られる時間のどの部分をプロファイルするかということなので、とがどのように現れるかということで動詞を分類する以外にはない。やの以前や以降の状態をスペース全体に広がるように解釈させる操作で、日本語のテイル形は、もしくはという状態変化以降の状態をプロファイルする操作としてある。この操作は動詞のタイプごとにプロファイルされる状態が異なる。「走っている」「本を読んでいる」「CDを聴いている」などのように Process の場合、しばしばが背景化されがプロファイルされるため、以降の状態、すなわち動作の進行状態を表すことが多い。これに対し、「到着している」「落ちている」「結婚している」「死んでいる」などはがプロファイルされる Transition であるため、それ以降の結果状態を表すことになる。しかしながら Process は基本的にを内在しているので、そのテイル形が結果状態を表す可能性は常に持っているのである。過去に起こった事態を確認するテイル形の記録と呼ばれる以下の用法はあらゆる Process の動詞が持っている。

(2) 警部、犯行のあった日の前日、ホシはこの店で味噌ラーメンを食べています。これを「食べる」が瞬間動詞として用いられた例である、というように個々の動詞の性質に還元してしまうと、すべての継続動詞が瞬間動詞としても用いられるということになる。そのような分析よりも、あくまで「食べる」は Process であるが、記録の用法としてテイルが適用された場合、がプロファイルされることになるという一般的な現象の現れとして(2)を分析すべきなのである。

Transition の動詞であってもからに至るプロセスをプロファイルすることになる言語操作も存在する。複数生起の連続であり、

- (3) a. 戦争でたくさんの人が次々と死んでいる。  
b. 大会を前に選手が次々と選手村に到着している。

などは個々の動作は Transition であっても複数自体の生起を1つの Process とするとらえ方を生み以降の事態の継続という解釈になる。

日本語のテイル形がもしくは以降の状態を表すのに対し、英語の進行形は以前の状態を表す。そのため Process の場合は以降以前の状態を表すことになり、日本語のテイル形と同じ内容になるが、Transition の場合、進行形は以前、テイル形は以降と全く異なった内容を表現する。He is arriving at the station.は「彼は駅に到着しつつある」であって「彼は駅に到着している」とは逆である。

多くの言語の現在形やフランス語の半過去形はあらゆる動詞を状態化する。

- (4) 彼はテニスをする

は、現在スペースにおける状態を表すので、文脈によってテニスをするという習慣があるという状態であったり、これからテニスをするつもりという意志を保持している状態であったり、という何らかの形で状態解釈を要求するものであり、この場合のアスペクトをどうとらえるか、という問題は語彙アスペクトの問題ではなく、時制の問題である。

このように個々の動詞の語彙アスペクトを明確に規定した上で、その語彙アスペクトに対してどのような変質が文脈によって加えられるのか、その文脈による変質を文法的アスペクトとして明らかにすることが、アスペクト研究のめざす方向である。

この姿勢を踏まえて、日本語のテイル形については

(5) テイル形は FOCUS と EVENT が重なり、そのスペース内に、動詞の表す状況の成立点以降の状態を登録する。

というように規定し、「動詞の表す状況の成立点」としていかなるものがあるのか、という問題と「成立点以降の状態」とはどのようなものであるか、ということの2つを検討した。動詞の表す状況の成立点は(1)で図示したように、動作の開始時点と終了時点である。そのどちらもが状況の成立点となることができ、を成立点とした場合の意味が「継続」であり、を成立点とした場合の意味がパーフェクトである。これらとの現れ方によっていくつかのタイプに分類することができる。一般に継続動詞とよばれ、ある程度の時間幅をもって成立する動作を表す動詞はこの2つが明確に認識されるため、テイル形は動作の継続を表すこともパーフェクトを表すことも出来る。それに対しいわゆる限界動詞と呼ばれている、変化する一点に於いて動詞の表す事態が成立する動詞の場合、からに至る相がそもそも存在しないので、単一の行為を問題にする場合はパーフェクトの意味のみが存在する。このように動詞の意味のありようによって、動作の始まりと、動作の終わりとの現れ方をもとに意味の種々相を分類することで、そ

の全体像を把握することが可能である。

このテイル形の例ではメンタルスペース理論がもつスペース間の関係としてのアスペクトより、動詞の語彙が本来もっている語彙アスペクトが関与的であったが、間接話法におけるテンス・アスペクト変換の問題はスペース理論により、より明確な説明を与えることができる。話法の問題は英語の場合もフランス語の場合も、過去形は間接話法になると have+pp. のような完了を表す形式に転換されるが、これはなぜなのか、また IMPERFECTIVE のアスペクトをもつフランス語の半過去はなぜ時制の一致の影響を受けないのか、日本語ではなぜ時制の一致が起きないのか、英仏語でも伝達動詞が未来の場合、なぜ時制の一致が起きないのか、などアスペクトに関する興味深い問題が多数含まれている。筆者がこの研究を通じて明らかにしたのは、フランス語の複合形式や英語の完了形式は FOCUS に対して EVENT が過去にある「完了 PERFECT」の意味を表すものだが、この際 FOCUS と EVENT の間には「過去 PAST」の関係が成立しており、「完了」は常に「過去」を内包し、この関係が話法において用いられるのである。話法とは BASE の位置にいる伝達者が現発話者の位置に V-POINT を移動し、そこからさらに EVENT や FOCUS の位置を現発話どおりに指定するというのが本来の形だが、現発話の時制と伝達文の時制とが同じ形式になる場合 V-POINT は現発話者の位置になくてもよい、ということが分かった。間接話法の本質は BASE の位置を現発話者の位置から伝達者の位置に換えることであり、その底流に現発話者の時制をできるだけ変えないという原理が働いている。半過去が間接話法でも変わらないこと、V-POINT が未来の位置に移動することは不可能なため未来の場合は BASE の位置までが未来の位置に移動することなど、これらの観察から説明が可能である。さらに日本語の場合、BASE が文の最後にならなければ指定されないため、そもそも時制の一致とは無縁であることもわかる。特に本研究が明らかにした現象は以下のものである。

- (6) a. Paul a dit : "Max était parti quand Julie lui a téléphoné."  
b. Paul a dit que Max était parti quand Julie lui a téléphoné.  
c. ?Paul a dit que Max était parti quand Julie lui avait téléphoné.

(Berthonneau & Kleiber 1997:116-117)

(6)は原則通りの時制の一致を行った(6c)より現発話と同じ時制をとった(6b)の方がむしろ自然である。一方(6c)と真理条件はわからない伝達文内で quand 節を前置した文

- (7) Paul a dit que quand Julie lui avait téléphoné Max était déjà parti.

だと問題なく容認される。これはメンタルスペースを用いなければ説明がかなり難しい問題であるが、井元 (2018)で、談話構成原理を利用しながらこの現象を説明できることを示した。

このような複雑な現象を説明できるようになったことが本研究の最大の成果であると言える。

## 参考文献

- Berthonneau, A.-M. & G. Kleiber (1997), "Subordination et temps grammaticaux: L'imparfait en discours indirect", *Le français moderne* 65, 113-141.  
Comrie, B. (1985), *Tense*, Cambridge University Press.  
Cutrer, M. (1994), *Time and tense in narrative and in everyday language*. Ph.D.thesis, University of California San Diego.  
井元秀剛 (2010) 『メンタルスペース理論による日仏英時制研究』ひつじ書房。  
井元秀剛 (2015) 「間接話法における時制 - 直示中心の移動か時制の一致か - 」『言語文化共同研究プロジェクト 2014 時空と認知の言語学 IV』。  
井元秀剛 (2017) 『中級フランス語-時制の謎を解く』白水社。  
井元秀剛 (2018) 「フランス語間接話法における時制」『言語文化研究』44, 1-18。  
金田一春彦 (1976) 『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房, 27-61。  
Pustejovsky, J. (1991), "The syntax of event structure", *Cognition* 41, 47-81.

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 井元秀剛	4. 巻 7
2. 論文標題 アスペクト研究覚え書き	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 言語文化共同研究プロジェクト2017 時空と認知の言語学	6. 最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 井元秀剛	4. 巻 44
2. 論文標題 フランス語間接話法における時制	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 言語文化研究	6. 最初と最後の頁 1-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 井元秀剛	4. 巻 42
2. 論文標題 条件文におけるスペース構成	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 言語文化研究	6. 最初と最後の頁 3-23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 井元秀剛	4. 巻 IV
2. 論文標題 間接話法における時制 - 直示中心の移動か時制の一致か -	5. 発行年 2015年
3. 雑誌名 言語文化共同プロジェクト2014	6. 最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計2件

1. 著者名 井元 秀剛	4. 発行年 2017年
2. 出版社 白水社	5. 総ページ数 181
3. 書名 中級フランス語 時制の謎を解く	

1. 著者名 井元秀剛	4. 発行年 2017年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 7 (313)
3. 書名 英語教育徹底リフレッシュグローバル化と21世紀型の教育ー	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----